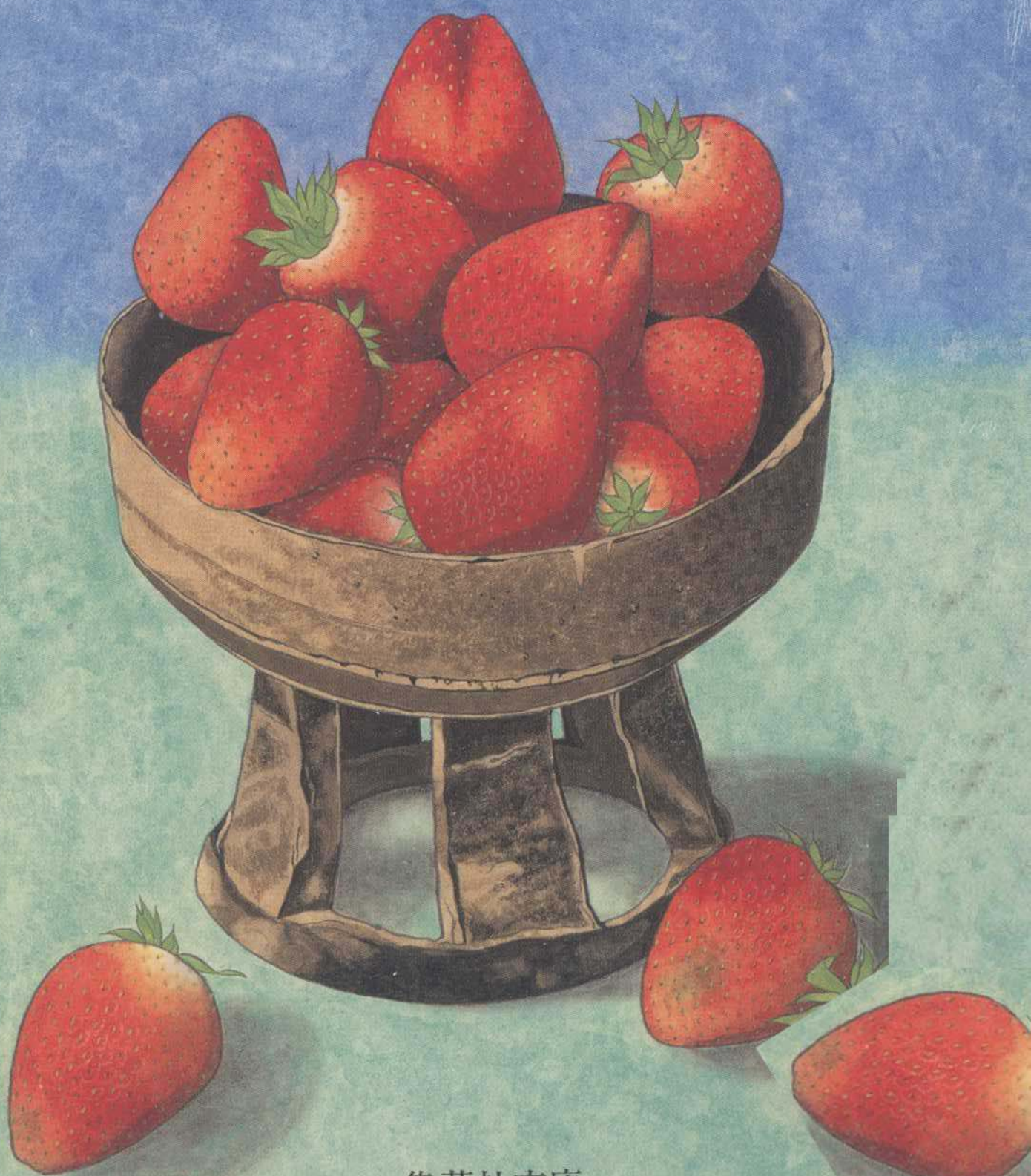


杉本苑子 干潟の秋



集英社文庫

ひがたあき 干潟の秋

1993 年 12 月 20 日 第 1 刷

定価はカバーに表示してあります。

著 者 すぎもと その こ
杉 本 苑 子

発行者 若 菜 正

発行所 株式 集 英 社
会社

東京都千代田区一ツ橋2-5-10
〒101-50

(3230) 6100 (編集)

電話 東京 (3230) 6393 (販売)

(3230) 6080 (制作)

印 刷 図書印刷株式会社

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社制作部宛にお送りください。
送料小社負担でお取り替えいたします。

© S. Sugimoto 1993

Printed in Japan

ISBN4-08-748114-X C0195

集英社文庫

干 潟 の 秋

杉 本 苑 子

目 次

芸をたずねる

秋夜雑感……………三

生きたカセット・ライブラリー……………一五

瑞嵐より出づる感……………一九

世阿弥への再出発……………三

「市川権十郎」のこと……………二五

残るさくら……………二九

ひとすじ青し隅田川……………三六

楽屋ばなし……………四〇

かぶき春宵……………四八

歴史を旅する

当麻の春……………五

鎌倉、足の向くまま……………五五

幼いほとけたち	六
花会式	七
宮苑幻想 —— ソウル散策 ——	四
石と塔に見る二つの不安	三
いつくしま幻想	九七
京の名園	二〇
土人形、思い出すまま	二五
神さまのお引越し	三〇
暴悪大笑面	二四
青梅そぞろ歩き	二八
壺坂寺	三九
鹿と猫	四七

味をもとめて

薔薇の砂糖菓子	一五四
君子の弁	一五七
選ぶ	一六一
小説と味	一六六
好味抄	一六九

*

いちごと枕草子	一七一
まんじゅう考	一七四
コンペイトウ献上	一七九
菊寿餅	一八三
ハリスとご馳走	一八六
乳母いらす	一九〇

*

うちの雑煮	一九三
正月の厨	一九六
駿河屋のかまぼこ	一九九
節分の夜	二〇四
桜を味わう	二〇六
初がつお	二〇八
涼しい食卓	二一一
おむすび雑感	二一五
まつたけ	二一八
芋よ、お前もか	二二一
木の実のいろいろ	二二四
老いの味覚	二二七

*

蓮の葉……………二三〇

柳橋たべある記……………二三四

茶店で食べる餅の味……………二四四

大仏さまのご馳走……………二五四

幼い日のこと

祝い着……………二六〇

正ちゃん、くわくわ……………二六三

惜しや、はこせこ……………二六六

山小屋の富士……………二六八

牛込馬場下町……………二七一

ハシカ正月……………二七五

解説 磯貝勝太郎

干 渴 の 秋

芸をたずねる

秋夜雜感

自分では唄えも弾けもしないのに、私は邦樂が何によらず好きで、聴きにはときどき出かける。

なぜ好きになったのか、いつごろからか、考えてみてもはっきりしない。三味線一挺、家にあつたわけではなく、下町そだちの母が、うろおぼえの小唄をくちずさむ程度 of 家庭環境にすぎなかつたのである。

たつた一人、母の兄に、義太夫をながいこと習っているひとがいた。娘義太夫はなやかなりしころの、いわゆるドウスル連の仲間で、お師匠さんはやはり昔、高座で人氣のあつた女の太夫さんだつた。

私ほども、義太夫のようなむずかしい芸能は、とうてい素人の、旦那芸では手に負えないものと頭からきめていたので、伯父の義太夫もどうせ、となり近所のヌカミソに被害を及ぼすくちだろうぐらいに思つていた。

「語つてきかせてよ」

と世辞は言っても、本気で聞くつもりはなく、伯父のほうもニヤニヤ笑うばかりで、義太夫の義の字も、ふだん口にしたことはなかったのである。

それが偶然、温習会に行き合せ、伯父の見台、肩衣かたぎぬすがたにはじめて接して、私は認識をあらためた。むろん素人だし、声量はなく、うまくもないが、きびしい師匠について正道をまっすぐ、まっ正直に歩いてきた者の骨法の正しさが、耳にすらツと気持よくひびいた。すなおに、しみじみ聴ければ、素人芸はもう、それでよい。

こんどは世辞ではなく、語ってくれとせがんだのだが、あいかわらず、てれて、「こいつめ、こっそり温習会へくるなんて卑怯なやつだ」

とり合わないまま伯父は他界してしまった。たった一度きりの『新口村』にのくちむらが、ふとすると耳によみがえる。

父の従兄いとこの、のちぞえの妻に、長唄の名取りがいて、小学二年生るとき私は彼女に『お月さまいくつ』だの『兎と亀のかけくらべ』など、愛らしい練習曲を幾つか習った。

やせぎすの、目のぱっちりした美人で、左づまを取っていたという前歴かたがらが堅物かたぶつぞろいの親戚をずいぶん、びっくりさせたらしいが、予想とはうらはらに、地味な、つつましい、むしろ沈んだ気だてのひとだった。

つややかにゆいあげた丸まげの、水色の手絡てがらのあざやかさが目にうかぶ。

あのまま習いつづけていたら、伯父の義太夫ではないけれども、私もやがては、せめて

すなおに、すらッと聴ける素人ぐらいにはなれたかもしれないのに、やめてしまったのは残念な気がする。

戦災で資産を失い、夫を失い、そのひとの消息はわからなくなった。赤い袋にはいった子供用の撥^{はち}だけがいま、私の手もとに残っている。

日本の伝統芸能はむずかしい。それだけにコクが深く、滋味はつきない。宝生流の謡曲と幸流の小鼓を、その後すこし、私はかじったが、習う苦しみも聴くよろこびも、混然として邦楽の醍醐^{だいご}味^みといえそうである。

ものの音色の冴える秋――。名人たちの名人芸を堪能^{なんのう}できる季節を、心ゆくまで今年もたのしみたい。

生きたカセット・ライブラリー

テレビドラマの影響か、今年は文化講演会、市民大学の催しなどに、古典平家にかかわりある話題を講演内容として希望してくる主催者が多かったし、しかも話のあとで、来場した人たちに平家琵琶^{びわ}を聞いてもらおうというなかなか楽しい、親切な企画が二、三、見られた。

もつとも平家琵琶と一口にいつても、古典平家に取材し新作した歌詞を、現在おこなわれている筑前琵琶なり薩摩琵琶なりの弾奏でうたう形のもの、中世の琵琶法師の弾法、語り口を、こんにちに伝承している無形文化財指定のいわゆる『平曲』との、二様があったようだ。

朝日新聞の名古屋支局が、やはりこの種の講演会を催したときは、たしか本格的な『平曲』だったが、この日すこし急いで東京に帰らなければならなかった私は、残念だとは思いつつながら自分の話がすむとすぐ、会場を出たため、拝聴の機会を逸してしまったし、したがってそのときの演奏者がどなたであったかも、つい、失念した。